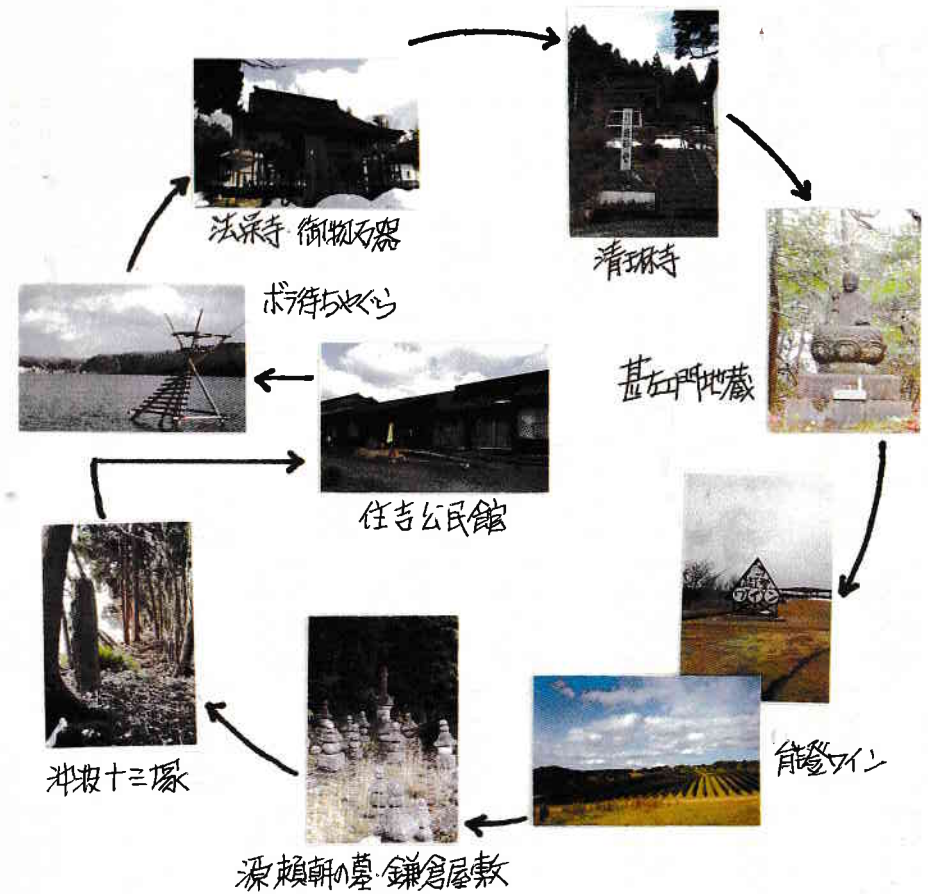


穴水再発見の旅

令和4年3月26日



連絡先: 927-0014 鳳珠郡穴水町堤1の197
 教育相談室「あした塾」事務局
 0768-56-1152 (FAX兼用)

「穴水再発見の旅」実行委員会事務局



比良・法榮寺

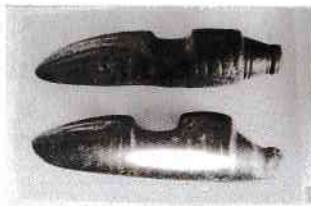
比良遺跡 と 御物石器

写真は法榮寺の裏山にある比良遺跡です。縄文遺跡です。「御物石器」が出土した頃は田んぼや畑だったようです。今は大部分が草木におおわれています。

穴水所には、縄文時代以来、多くの遺跡があります。甲川寺遺跡、新崎遺跡、比良遺跡などです。また古墳時代の遺跡には、前段古墳群、内浦の袖ヶ畑遺跡があります。

比良遺跡から出土した「コイの置物」の石の石器は、1878年(明治11年)に明治天皇が東海北陸を巡幸されたとき、本願寺を介して明治天皇に献上されました。この石器が帝室御物となったことで「御物石器」と呼ばれるようになったとのこと。比良は、この名称の発祥地にあります。

写真は「御物石器」2点です。実物は国立博物館にあります。一度だけ穴水に持って来たことがあるそうです。レプリカが穴水所歴史民俗資料館にあります。この石器は飛騨地方から北陸地方で多く出土するようです。



「御物石器」などについては穴水町教育委員(会)発行の文化財史などに載っています。

比良・法榮寺には



写真右の石器は明治天皇に献上されたものと同一物です。

残念ながら両端が欠けており完全な形ではありませんが、比良法榮寺で所蔵しています。町指定有形文化財になっています。

「あはれず百物語」(岡本伊佐著)

石の工のおきもの

明治の初めのある日、上野畑で仕事をしていたおばあさんが、変な形をした石を2つ見つけました。おばあさんには、それが「コイのおきもの」に見えました。そんなある日、東本願寺門跡(一門の法跡)が奥能登へやってきました。おばあさんは病気で寝ていたのですが、門跡に会いに来て、この石の「コイ」をおみやげに持っていきました。「門跡さま、私の気持ちを受け取ってください。」と涙したそうです。



遺跡からは写真のよういろいろな石器などが出土しています。これは法榮寺の住職によつて、2010年に保管されています。何を教えてくれているのか...

東中岩・清琳寺 甚左衛門地蔵

戸水町東中岩にある真宗大谷派清琳寺。「あなす百物語」に収録されている民謡『甚左衛門地蔵』にゆかりのある寺院です。

境内には甚左衛門が寄進した「灯笼」が2基あります。



東中岩(ひがしなかつが)清琳寺と甚左衛門が寄進した2基の灯笼。安政二年十一月の文字が。

北・清琳寺から少し離れた戸水町曹山と熊登所武連の境付近に「甚左衛門地蔵」があります。

この地蔵は文久三年(1863年)に寄進されたそうです。

刻印を確かめてください。

そのときどきに地域の人たちがお参りをしたり、整備をしています。

民謡「甚左衛門地蔵」

昔、京の曹山村に甚左衛門という男がいました。貧乏な田舎暮らしに飽き飽きした甚左衛門は、旗揚げつと京の都へ出稼ぎに行きました。いよいよ思ひにおおせず、ついには辻強盗を働くおんだ生活を送っていました。

ある日、旅人からふところのきみを奪うのが、それは川を渡る地蔵でした。夢の中に曹山村の地蔵が現れ、母親の子を思ひ思いを石地蔵にして渡したことを話してくれました。ハッと目を醒ました甚左衛門は、おだめやお笑みを浮かべた母親の顔を石地蔵を見て、いとおろちめ一生懸命に働いたそうです。その後、曹山村に帰った甚左衛門は母親の死を知り、都を賤えたお金を惜しげもなく使ひ、東中岩の清琳寺に灯笼を寄進したり、曹山村の地蔵の近くに地蔵を一体建ててお守りしたとのこと。



東中岩の清琳寺には見所が満載の寺です。

樹齢300年を超える杉とケヤキの大木があります。

見応え充分です。あなす住職のお話を。

なく使ひ、東中岩の清琳寺に灯笼を寄進したり、曹山村の地蔵の近くに地蔵を一体建ててお守りしたとのこと。

(岡本伊佐夫編著「あなす百物語」より)

能登ワイン



能登ワインのぶどう畑。夏の暑い陽ざしの中で緑のブドウ棚が一面に広がっています。この頃、ブドウの実はまだ緑のツブのままで、やがて「能登ワイン」として市場に出来ることになります。2006年に本格的に醸造を

はじめた能登ワインは、
穴氷で寒った
ブドウだけを
ブレンドした



単一品種のワインに作っています。



能登ワインは ぶどう畑が広がる丘の上にワイン醸造所を持ち、試飲と見学が自由にできるギャラリーがあります。能登の風土に育った能登産ワイン専用ブドウを何も足さずに醸し出した本格的な生ワインです。(能登ワイン(株)ホームページ)



能登ワイン(株)/能登ワイン
マスカットベリー-Aの压榨。



能登ワイン(株)/能登ワイン
自社畑冬の剪定作業。

(写真はいつでも能登ワイン(株)ホームページから)



明泉寺の五輪塔と石塔群

石川明子寺には真言宗の別名「白雉山明泉寺」があります。石川県指定史跡「石塔群」があり、その案内板には「建久年間(1190)・頼朝の帰依により、諸橋本郷の内、高坂、上田、明子寺の3ヶ所が寄進され、隆盛を誇ったもので、現在のおびただしい石造遺跡は、その当時のものであります。」と書かれています。明泉寺境内には約150基、鎌倉屋敷には約70基の宝篋印塔、五輪塔、板碑などがあり、



いずれも鎌倉時代、室町時代の石造物ということができます。

また、明泉寺には、全国に類がない国指定重要文化財の石造五輪塔があります。(写真)



「明泉寺絵図」に見える鎌倉屋敷
(北国新聞社 能登国三ノ観音のそば)

鎌倉屋敷 源頼朝の墓

明泉寺から南東200mほど離れた集落の中に鎌倉屋敷と呼ばれる中世の五輪塔群があります。約70基。中央のひとりの大きな宝篋印塔は源頼朝のものと言われています。周囲の五輪塔は頼朝に代わって家来のものに見えてきます。

明泉寺に伝わる「明泉寺古絵図」(上の写真)にも鎌倉屋敷が描かれています。

新川上田寺

新川上田寺は明泉寺の塔頭寺院です。明泉寺と同じ白雉山を山号にしている。芳宮、幡宮に隣接しているそうです。(今後の調査が必要)



沖波十三塚経塚



沖波集落の北方、「十三塚」は標高30mほどの地点、やや平坦な段丘上山林にある。この段丘から立山連峰が一望できる。

ここに、直径6mほど、高さ1.5mほどの塚を中心に高さ50cmほどの種子陰刻の板碑の立っている13の塚が南東140mほどの間に並んでいる。(残念なことに中央付近の2基は道路貫通で破壊されている。) 村人は塚の板碑を地藏尊として祈願したものと思われる。



昭和38年(1963)
町文化財史跡指定



昭和29年(1954)9月に東京国立博物館学芸部長だった石田英作氏(故人)が調査した仏像も経筒も見えなかった。

(以上、談橋村史より)



蘇る歴史

『鳳至郡誌』は「字沖波に京塚といふありて、地藏菩薩の形を為せる多くの石あり。人病む時之を拝すれば、必ず平癒せざることをしといふ。」と記している。この十三塚は室町時代この地方の弥勒信仰を示す重要遺跡であることがわかっていく。しかし、長期にわたって訪れる人もなく埋もれたまま残っていたため荒れ放題の状態でした。

令和4年2月、沖波地区住民と応援ボランティアの整備作業がすべての塚(11基)が姿を表しました。



(ボランティアの皆さんによる整備作業)